

啄木の出現した場所

上田 博

S—村物語

《通行^{とほり}少き青森街道を、盛岡から北へ五里、北上川に架けた船網^{ふなみ}橋といふを渡つて六七町も行くど、若松の並木が途絶えて見すばらしい田舎町に入る。両側百戸足らずの家並の、十が九までは古い茅葺勝で、屋根の上には百合や萱草や桔梗が生えた、昔の道中記にある渋民の宿場の跡がこれで、村人はたゞ町と呼んでゐる。》

呉服屋、菓子屋、雑貨屋、荒物屋、理髪店、豆腐屋、酒店など、地の人の生活必需品はほほこで足りる。村役場、郵便局、駐在所、登記所が街道のほほ中ほどにあり、町の南端れに小学校があり、北の端れの青田を貫いて《寺道が、二町許りを真直に、宝徳寺の門》がある。明治二〇年春、新住職として三里山里の常光寺から移住してきた石川一楨は、妻、一二歳と一〇歳の二人の娘、

二歳の男児を伴っていた。
日本鉄道は、明治二年一月には、東京・盛岡間を開通させていたが、二四年一月に鉄路を青森まで延ばした。岩手県内の停車場は盛岡・好摩など一三駅であったが、旧宿場渋民は、地元の強い反対によつて、駅を設けることができなかつた。

先の渋民村のスケッチは、啄木の生前唯一の新聞連載小説「鳥影」(明41・11〜同12、東京毎日新聞)にある。

小川静子は、兄の信吾が大学の夏期休暇で帰省するといふので、妹と下男を伴れて好摩の停車場まで迎えに出た。《もともと鋤一つ入れたことのない荒地の中に建てられた、小さい三等駅だから、乗降の客と言つても日に二十人が関の山》。信吾は二等車から降りてくる。ネルの単衣に涼しそうな生絹の兵子帯、紺キヤラコの夏足袋、細い楳目の下駄。一年ぶりに再会する妹の目に、兄の姿は《東京》そのものと見えた。在所の相当の資産家、地主で、《客自慢》をする小川家に集まる人々の、ある夏の数日間の人間模様

が描かれる。祭礼はもとより、カルタ会、釣仲間の会など、村の小作以外の者たち——小学校の校長、教師、役場の吏員、巡査、医者など、暇を持って余す人たちが溜るための名目はすべて動員される。他国の人と物の流通で殷賑をきわめた宿場町が、鉄道の通過地を選んだとき、町の衰微とそこに住む人々の心の屈折が、一時の生活の安定をも大きく掘り崩すことになろうとは、誰の意識にも上らなかつたのではあるまいか。

《村から一里許りのK停車場に通ふ荷馬車が、日に二度も三度も、村端むらぢまから真直に北に開いた国道を塵塗ちりまみれの黒馬の蹄に埃を立てて往返りしてゐた》

このスケッチは、作者の幼時の追懐をモチーフとし、心情をテーマとする優れた小品「二筋の血」に出てくる街道風景であるが、他国への空気は《荷馬車》によつて辛うじて通つてくるのである。

さて大学生信吾は、自分を忘れられないまま村医者に嫁入りした女を、《猫が鼠を齧る如く》荒んだ恋の驕慢でもつて相手にし、さげした面白い女教師と肉欲を偷み、小川家に寄食する叔父の詩人ぶつた振る舞いを冷罵する。後に啄木は永井荷風について、《私は、近頃、氏の「新婦朝者の日記」を読んだ時程、不愉快に感じた事はない。あの作には永く東京にゐて金を使つた田舎の小都会の金持の息子が、故郷へ帰つて来て、何もせずにはぶらぶらしてゐながら、土地の芸者の野暮な事、土臭い事を、いや味たつぷりな口吻で逢ふ人毎に説いてゐるやうな趣きがある》（「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」明42・12）と批判したが、一七歳から一

九歳の春までを、文学修業と称し、あるいは処女詩集刊行の為に称して、幾回かの上京と帰郷を繰り返した自身の姿が、信吾の心情の上に影を落していること、明らかである。荷風の姿を正視することに耐えなかつた理由が、ここにある。東京擦れのした信吾の言動によつて、小川家とそこに寄生してくる人々の人間関係の歪みが明るみに引き出されるが、それは外界から孤立した土地柄と無関係ではない。

正宗白鳥の名作「二家族」（「早稻田文学」明41・9〜42・5）は、瀬戸浦に住む小さな村の二名家の、対照的な暮らし方を描いている。《鋤鎌も執つて、着実に一家を経営》する家長とその家族、いま一つは一攫千金を夢みてさまざまな経営に手を着け、挙句に《その身代も年々下り坂》になり、家屋敷身ぐるみ競売に掛けられる家長。それでも人間の面白さは、人間タイプを内側から崩してゆくことにある。競売に追い詰められた喜助が、物堅く信用のある清吉を岡山の関係筋への懇願のために誘い出し、誘われた清吉は遊郭に上つて、幾夜かを《太鼓や三味線で賑やかな中を色の白い唇の紅の女》の胸に過ごし、自分でも信じられない女の甘い口説きを聞いてしまったことで、生まれて初めて《村の淋しく厭はしき》ことを知るのである。清吉の息子猛夫もまた、次々に思い描く夢に自分を食わせ続ける叔父を父よりも尊敬し、《いろいろの事をして失敗したり貧乏してもエライ人は矢張エライ人だから》と弁護する。居馴れた土地に居続けて、幾夜かの甘い味

を反芻しながら年老いてゆく人間、夢に食われて滅亡してゆく人間、そうした大人の処世を敏感に感受して《我は遂にこの村の民に非ずと得意の念に駆られて、野良に散らばつて醜い人間を卑し》み、上級の学校へ進学する機会に村を離れてゆく若い世代。

啄木の中絶した小品「刑余の叔父」（明41・7）は未発表ではあるが、白鳥の「二家族」の原型とも言える面影をとどめて、惜しまれる。村に土族が三軒あった。いずれも旧南部藩の武家であったが、鹿藩置県と転封の際に、城下からこの村に逼塞したのである。一軒は大黒柱が病没して、残された老人と美しい娘は子供相手の駄菓子屋に零落している。あとの二軒、高田家と工藤家は、小身ではあったが、先の家よりも古くからの南部藩の家臣である。高田家も柱が亡くなって、その弟が二人の子持ちの嫂を嫁にして家督を継いだ。この男、高田源作は《飲んで、飲んで、田舎一般の勘定日なる盆と大晦日の度、片端から田や畑を酒屋に書入れ》馬も売り、大櫓まで伐つてしまうほどの道楽者。屋根が漏つても、妻子が食うに困つても一向に平気。《自分一人、誰にも頭を下げず、言ひたい事を言ひ、為たい事をして、酒さへ飲めれば可》いのである。《夜と黄昏との家》である高田家には、五人の子供と母親が、いつも臭気を発してごろごろしている。子供のうちの一人は、村の駐在所の巡査を間男にして生まれたとか、巡吉と名付けられている。片や工藤家の当主は《小心な実直者で、酒は真の交際に用ゆるだけ。四書五経を読んだ頭脳だから村の人の信頼が厚く》、村会議員には欠けたことがない。だが、工藤家の跡取り

息子は、源作が先の駄菓子屋の美しい娘と小屋の藁の中に寝ているのを目撃しても、大の源作最扇で、《世の中で源作叔父程豪い人がない様に思》っているのである。

白鳥の「二家族」に登場する子供たち、喜助の息子貞一と清吉の息子猛夫の、それぞれの性格の書き分けも興味深い。貞一は父親譲りで一四歳ですでに年上の女相手のませた遊びに熱中し、従兄弟の猛夫を相手に引き入れようとす。一目散に逃げて家へ帰った猛夫は、机の前で一息入れて、そうして《暫らく「文庫」や「少年園」を読み耽つた。読書は何時も面白い。他郷は何時も懐しくて、この村は何時も厭はしい》と心に思うのである。居馴れた場所を、こうして一度暗く厭わしい場所と思ひ詰めてしまえば、後はここから脱出する口実と現実の契機をつかむために、残りの人生の全ての希望が賭けられるのである。

《明治43年》十一月——八日野辺地の葛原対月老僧盛岡にて死す。父の師僧にして母の兄なり。報に接して父急遽盛岡に下り、云々、と啄木は日記に記している。啄木の父一禎は、岩手郡平館村の農石川与左衛門の五男に生まれ、後、養子先から菩提寺曹洞宗大泉院に托された。一禎は同寺で成長し、仏道を修業したが、一七世住職葛原対月の学識の薫陶深く、和歌の道もこの学僧からの薫染による。葛原対月の出自は南部初代からの家臣で、前記「刑余の叔父」の中に《工藤家——私の家は小身ではあったが、南部初代の殿様が甲斐の国から三戸の城に移つた、其時からの家臣》

と書いているのは、こうした事実を踏まえているのである。対月は仕官を嫌つて仏門に入り、慶応二年に大泉院住職となり、一禎の師僧となった。対月はこの寺から盛岡の名刹龍谷寺住職として栄転し、対月に伴われた石川一禎は、対月の妹で三歳年上の工藤かつと出会つて結婚した。一禎が二五歳の若さで、盛岡から三里離れた山中の村落日戸村の常光寺住職に抜てきされたのは、師僧であり義兄ともなつた対月の、後押しがあつたと言われている。明治一九年の春、隣村である北岩手郡渋民村の万年山宝徳寺の住職、遊座徳英が急逝。継ぐべき子供は幼く、本山、檀徒の間で善後策を苦慮する間に、石川一禎の転住の下工作が実つた。遊座家は路頭に迷い、代わつて石川家が、寺格も高く檀家数も多く、交通に至便で、子供の教育などすべてに好条件の宝徳寺へ入つたのである。長男「啄木」生まれて一年のことである。

《——村で誰か死んだ。誰が死んだのか解らぬが、何でも老人だつた様だ。そして其葬式が村役場から出た。男も女も、村中の人皆野送の列に加つたが、巡査は劍の束に手をかけながら、『物を言ふな、物を言ふな』と言つてゐた。北の村端から東に折れると、一町半の寺道、其半ば位まで行つた時には、野送の人が男許り、然も皆洋服を着たり紋付を着たりして、立派な帽子を冠つた髯の生えた人達許りで、其中に自分だけが腕車の上に縛られてゆくのであつたが、甚麼人が其腕車を曳いてたのか解らぬ。杉の木の下を通つて、寺の庭で三遍廻つて、本堂に入ると、棺桶の中か

ら何ともいへぬ綺麗な服装をした、美しいお姫様の様な人が出て中央に坐つた。自分も男達と共に坐ると、『お前は女だから。』と言つて、ずつと前の方へ出された。見た事もない小僧達が奥の方から沢山出て来て、鐘や太鼓を鳴らし初めた。それは喇叭節の節であつた。と、例の和尚様が扨子を持つて出て来て、綺麗なお姫様の前へ行つて叩頭をしたと思ふと、自分の方へ歩いて来た。高い足駄を穿いてゐる。そして自分の前に突立つて、『お八重、お前はあのお姫様の代りにお墓に入るのだぞ。』と言つた。すると何時の間にか源助さんが側に来てゐて、自分の耳に口をあてて『厭だと言へ、厭だと言へ。』と教へて呉れた。で、『厭だす。』と言つて横を向くと、(此時寢返りしたのだらう。)和尚様が廻つて来て、髭の無い頸に手をやつて、丁度髭を撫で下げる様な具合にすると、赤い血の様な髭が、延びたく、臍のあたりまで延びた。そして、眼を皿の様に大きくして、『これでもか?』と、怒鳴つた。其時目が覚めた。』

奇怪な夢の話は、故郷物の小説「天鷲絨」(明41・6未発表)に描かれたものである。かつて、この村で床屋(理髮店)を開いていた源助が、五蘭盆の後の、村の人が年中でいばん無聊を感じる時期に、ふらりと再訪する。垢抜けた東京風の服装と都会の話と土産物。それでなくても都会の飾り窓に腰の落ち着かない村の娘、お八重とお定の二人が、源助さんに誘い出されて家出をする。東京見物をして、女中奉公をしてわずか二日目、故郷からの迎えの人に二人は連れ戻されるという話である。お定は家庭に

も全く不満がなく、度々夜の床に忍んで来る恋人も居て、家出するほどの動機はなく、家出に積極的なお八重への対抗心から付いて来たまでのこと。お八重は生来《負嫌ひの、我的強い児で、娘盛りになつてからは、手もつけられぬ阿婆摺れ》娘だが、その根っこには《唯四十円で家屋敷白井様（大地主）に取上げられた》口惜しい百姓家の生活感覚がある。先のお八重の夢、棺桶の中から出てきた《綺麗な服装をした、美しいお姫様》の身代わりに、腕車に縛られてきたお八重がお墓に入ること強制される場面で、その執行人が《例の和尚様》になつてゐることが、*ミソ*である。東京の源助さんが、《厭だと言へ、厭だと言へ。》と声を励まして助け船を出し、和尚様が物凄しい形相をして娘を脅迫する。お八重がこれをお定に語り終わつてから、二人は気味悪くなつて《暫時意味あり気》に目を合わせるのである。この場面を書きながら啄木は、近い過去のこと——檀家の期待を荷つて盛岡へ遊学した少年一が、恋愛と文学の強い香りに誘惑されて、中学を中退して東京へと脱出した日のこと、病と生活に窮して父に伴われて帰郷した日のことどもを走馬灯のように思い泛べていたのではあるまいか。

正宗白鳥の小説「入江のほとり」では、父が、瀬戸内の小さな漁村で東京生活を夢見る娘に、《若い間はあんな町で好きなことをして暮すのもよからうが、歳を取つたら居れる所ぢやない。田んぼまで売つて大阪や神戸へ行つた者が、よく見い。大抵は失敗つてヒヨク／＼戻つて来るぢやないか。儲けて他所の銭を持つて戻

る者は十人に一人もありやせん。大抵はこの貧乏村の銭を持出して都会へ捨てに行くんぢやから、村はますます／＼貧乏になるばかりぢや。近い話が寺の坊主からして、わざ／＼損をしに神戸へ投機をやりに行くといふ有様だもの》とグチを言う。母親は住職が祖母の二三回忌までに戻つてくるだらうかと心配し、父は《坊主は寺の物を売飛ばして他所へ行つてもよからうが、さう荒らして出られぢや、後ではこの寺へ来て呉れ手がないから檀家が迷惑ぢや》と真剣に心配する。

明治三五年一〇月、宝徳寺の跡取り息子が、突然盛岡中学を中退して慌しく上京したことは、檀家の人々にとつては一大事件であつた。東京で学問をして、都会のイルミネーションの光に照らされた若者が、《郵便局の軒燈のみ淋しく遠く光つてゐる》村の生活に戻らなかつた例は、漱石の「こゝろ」の《先生》の来歴を引くまでもない。都会暮らしをした者が田舎を頼りにするのは、米櫃が空になつた時とか、病身を自然の中に養う時とかであつて、「入江のほとり」の父、才次ならずとも、《此方で質素な生活をしとる者は迷惑するし、第一割に合はん話》である。三八年三月、石川一禎が本山から宗費滞納の故をもつて罷免され、宝徳寺を追い出されたのは、跡取り息子の東京遊学中の借金返済のための金策をめぐる、檀家との悶着が原因と伝えられている。後年、宝徳寺に復帰した遊座家の遊座昭吾は、一禎が息子に対して、寺の跡取りとしての一切の躰をした痕跡がないと証言する。この父にしても、百姓の口減らしのために、幼時から他人の米櫃に頼つて生

きなければならなかった、その辛い人生を思えば、《神童》と村人から一目置かれたわが息子の才能を、寒村の一住職につなぎ止める腹積もりなど頭からなかつたことを、誰が見識と責められようか。この父、この母の心は、息子の本望であつたはずである。

小説「鳥影」が、——S村の暇を持て余す人たちの猥雑な一面を描いているのに対して、「赤痢」(「スバル」明42・1)はインチキ宗教家の色欲と破滅の場所としての——S村の陰湿な一面を描いている。

《凸凹の石高路、その往還を右左から挟んだ低い茅葺屋根が、凡そ六七十もあらう、何の家も、何の家も、古びて、穢なくて、壁が落ちて、柱が歪んで、隣々に倒り合つて辛々支へてる様に見える。》

《両側の狭い浅い溝には、糞糞片や葫蘿蔔の切端などがユラユラした涅泥に沈んで、黝黒い水に毒茸の様な濁つた泡が、プクプク浮んで流れた。》

赤痢が蔓延して、外界からの交通を途絶された村の異様な風景というよりは、文明の本流から孤立して「遊水池」と化した村の、空気の停滞を風景化したものと言つた方が適切ではないか。村外の街道から脇道に折れると、《寺道が、二町許りを真直に、宝徳寺の門に隠れる。寺を囲んで蔘鬱とした杉の木立の上には、姫神山が金字塔の様に見える》。寺は地形の上からも、《見すばらしい田舎町》とは一線を画する。啄木、石川一は、寺の子として

生まれながら、寺からの脱出をたえず続けていたのである。父と母との強力な後押しを体感しながら。「天鷲絨」の家出娘お定が《(故郷へ)帰つて来られぬ事があるものか》と心に思うところの思いも、もう一人の家出娘お八重が《帰つて来なくても可い》と思う思いも、どちらも田舎を持つ人の心の真相ではあるが、寺の子の心の真相は、最初からどこか一般の田舎人とは違つていて、精神の方向はまっすぐに都会へ、東京へと向かつていたのでないか。

暇な人たちが、何かと口実を設けて集まる「鳥影」の舞台——地主の小川家に、唯の一度も寺の人間が顔を出さない不自然にも、寺の子石川一の心情の自然が、自ずから現われているのである。お定を表向きの主役に押し立てながら、脇役に回つたお八重に描いた都会人の風貌と行動の陰に、作者の姿を隠したのである。葬式が《村役場》から出、《巡査》が野送の列に向かつて《物を言ふな、物を言ふな》と威圧を加え、《和尚》が《血の様な髭》を延ばして《これでもか?》と恫喝する。地霊と人間社会の制度が結託した不気味な相は、お八重の夢の現実、に姿をあらわして、精神の自由を想望する人間の前に、怪異な障害物としての黒い姿を示して威嚇したのである。人間と社会の俗悪に対する警世者として飛び立つ啄木鳥——「林中の鳥」は、——S村に顕在する醜態と停滞、さまざまな圧迫と束縛などとの対峙関係の中に生まれたものであつて、単なる自然環境の中から飛び立つたものではないことを知らねばならぬ。(うえだ・ひろし 本学教授)